

# 木全ミツの グローバル随想

新連載 第1回

## 思い起こすと……



イラスト・題字：長峯亜里

1960年代初頭、先進国の仲間入りをした日本の役割の1つとして、世界の開発途上諸国に対する経済・技術協力業務の推進が各省に求められてきた。

労働省(当時)も例外ではなかった。労働行政の分野で何が貢献できるか検討された結果、「日本の経済成長の縁の下での力持ちとなってきた技能人材の育成、すなわち職業訓練の分野が最も貢献できるのではないか」、「それにしても労働省では特に英語で対応できる人材という観点から採用をしていないのでどうしたものか」、「それでは卒業したての者が担当してはどうか」、ということから大学卒業後、労働省職業訓練部に籍を置いていた私が担当を命じられた。労働省の技能人材育成分野における今でいう政府開発援助(ODA)の1ページである。

思えば日本がまだ開発途上国であった大学1年生の時、「日本もいつの日か欧米先進国と対峙する時代が来る。その時に自分の考えを自分の言葉で堂々と発言できない、そんな哀れな日本人にはなりたくない」と思い、ESS(English Speaking Society)というサークルに入って英語力を磨いたことが、早速役に立つことになる。

### 手探りで海外技能人材育成

当時は毎月、外務省経済協力局技術協力課長が主催する会議に参加し指導を仰ぎながら、JICA

(国際協力機構)の前身であるOTCA(海外技術協力事業団)のさらに前のアジア協会と協力しながら、まず東南アジア諸国の行政官を招聘し職業訓練や監督者訓練などの行政官セミナー(1~2カ月)を実施することから始めた。東南アジア各国からの研修生の招聘、セミナーの日程、講義内容、講師の選定・依頼、企業見学・視察、京都・奈良を中心とする観光、歓迎会の設営などの準備はもとより、前例もなく、経験者や先輩もいない中で、手探り状況の中での取り組みから始まった。労働省内では「変な顔をした人たちを相手に、変な言葉を使って……あれが労働行政かよ、仕事かよ」と白い眼で見られ、指をさされる継子行政であった。

それでも私は、時間を見つけては、各国からの参加者と「皆さんのお国の20年、30年先の技能人材育成の将来像は……」等について熱心に意見交換をした。真剣な眼差しで語る彼らの瞳の奥のキラッと光る輝きに、私は胸を打たれ感動するとともに、日本にできることは何かを真剣に考え模索する興奮の毎日であった。

ある時、参加研修生(15~16人)の間に不穏な雰囲気を感じた。早速、単刀直入に話を聞いてみると、「木全さんは〇〇国の研究生とは5分も話したのに、自分は2~3分しか話を聞いてもらえなかった」と私が原因であることが分かった。全ての国々からの研修生に対していかに平等に対